

IV 水辺に向かって立つ建築：中之島とその周辺

近世から、中之島は大阪の経済を支える中心としてその繁栄の中心にあった。江戸時代は全国の各藩の蔵屋敷が林立し、堂島浜にあった米会所は蔵屋敷に集められた日本中の米を取引するまさに経済の中心であった。近代に入ると、中之島は日本銀行大阪支店（1903年：辰野金吾）、中之島図書館（1904年：野口孫市、日高胖）、中央公会堂（1918年：岡田信一郎※実施設計は辰野金吾・片岡安）、旧大阪市役所（1921年：小川陽吉※実施設計は片岡安・市臨時建築部）など大阪を代表する建築物が建ちならんだ。

大阪市区改正設計（1919年～）、第一次大阪都市計画事業（1921年～）といった近代都市計画の萌芽期、中之島には淀屋橋・大江橋をはじめとする意匠豊かな近代橋梁群も配置され、中之島は大大阪のシビックセンターとしての偉観を見せるようになる。こうした動きに呼応して、中之島と川向かいの水辺には、[ダイビル本館](#)（1925年：渡辺節）、[三井住友銀行大阪本店ビル](#)（1930年：長谷部鋭吉・竹腰健造、住友建築部）大阪朝日ビルディング（1931年：石川純一郎、竹中工務店）、大林組旧本店で今はレストランとなっている[ルポンドシエルビル](#)（1926年：大林組）、現在は喫茶店となっている[北浜レトロビルヂング](#)（1912年：設計不詳）など、当時最先端の民間ビルが水辺に向かって建つモダンな姿を見せ始めるようになる。

水辺に向かって立つ建築の流れは周囲にもみられた。当時は江戸堀川に面していた[江戸堀コダマビル「旧児玉竹次郎邸」](#)（1935年：岡本工務店）のように、現在はその大半が埋め立てられてしまったが、大阪都心を縦横に貫く堀川沿いに瀟洒な建築が水辺の景観をつくっていた。大阪港発祥の地であり、居留地がおかれた川口では、[日本聖公会川口基督教会](#)（1920年：ウイルソン）や、住友倉庫（1929年：住友合資会社工作部）などもその用途は異なるが同じ系譜に位置づけられるであろう。

現在、中之島では、リニューアルされた中央公会堂をはじめ、かつての面影を保ちつつ、京阪中之島線の整備に伴う再整備、中之島公園のリニューアルなどによって、大阪を代表する水辺景観が形成されている。順次、民間建築の建替えも進んでいるが、ダイビル本館の建替えでは、旧館の材料を再利用して外観・内観が復元され、中之島の新たなランドマークとして、水辺に向かって堂々と建ちながら、現代的な要請にも対応して再生を遂げている。

中之島では大規模な再開発も進んでおり、今後、ますます新しい時代の水都大阪を象徴する水辺建築が登場するだろう。（[嘉名光市](#)）



写真 中之島公園にある中央公会堂 (出所 VIEWS OF OSAKA 大大阪)